

「親鸞教義に於ける『往生論註』性功德積の意義」

網 代 豊 和

はじめに

親鸞教義を構成する軸となるべき書物は『教行信証』である。その中で親鸞教義が成立しえた基盤を示す巻を窺えば『真仏土巻』にあると解釈できよう。その理由は『教巻』冒頭に「謹按浄土真宗、有二種廻向。一者往相、二者還相」とあるが如く、浄土真宗の教義の根底には往還二廻向が見出されるのであり、それらの廻向を成立させしめる根源的場こそ真仏土である事に依る。従って真仏土の内実を尋ねることは、親鸞教義の基盤を明確に明かすことになるであろう。

親鸞は真仏土を「不可思議光如来」と「無量光明土」とを以って定義し経文を引いて仏土の性質を示す。そこでは第一義諦なる智慧が大悲なる仏土として顕示されるところに「不可思議光如来」・「無量光明土」としての意義が明かされると考えられよう。そしてその意義を詳説する為、論釈を以って仏土の論理を展開する。その論理展開の主眼となるのが、今

取り上げる『往生論註』性功德積である。ここに親鸞の仏土の根源的性格論理を明かすのである。そこには「然則酬報大悲誓願故曰真報仏土」なる誓願酬報という仏土の本質の構造論理が詳説されるのである。そこで当稿において性功德積の中には真仏土が真の報仏土として成立する根源的論理の基底を探っていききたい。

1、「性」の「本」義

①性は本義 言此浄土隨順法性 不乖法本 事同華嚴經寶王如来性起義(『定親全』一、二五〇)

「性」は「本」の義と示される様に、「法本」たる「法性」の意として明かされる。この「性」なる「法性」は「法性寂滅故」「法性無相故」と言われる如き「寂滅」・「無相」であり、その本質は空性なる第一義諦として解釈されている。かかる第一義諦は衆生にとって無限なる否定の果てに不可言説として成立する絶対隔絶の境地である。しかしながら、それ

と同時に寂滅無相なる第一義諦は「無相故能無不相」と言われる如く世俗諦へと自由に展開する性質を根底に孕んでいる。例えば親鸞が『真仏土巻』に於いて『涅槃經』の引文を取り上げ「善男子如来世尊は衆生の為の故に（中略）第一義諦を説きて世諦と為す。世諦の法を説きて第一義諦と為す」と指摘されるが如く、衆生済度を目的として世俗諦へ顕現するのである。よって衆生においては世俗諦として顕現された、事の内幕にこそ重要な意義を見出すのである。従つてこの世俗諦への顕現として明かされる仏土には「此淨土隨順法性不乖法本」という本質的要素が内包されると共に、その内幕には衆生救済の意義が明示されるといえる。

この「法性」に随順し、「法本」に不乖なる淨土の顕現は、「事同華嚴經寶王如來性起義」と指示されるように、『華嚴經』の『如來性起品』（如來性起の正法が世俗諦へ起くる（大悲）正しい意義を明かす品）によつて表わされる。そこには

如來應供等正覺の性起の正法は思議すべからず。所以は何ん、少因縁にて等正覺を成じて世に出興したまうには非ず。佛子よ、十種の無量無數なる百千阿僧祇の因縁を以て、等正覺を成じ世に興したまへり（『大正藏』九・六一二中）

と示され、如來性起の法が世に出興せる正しき意義は十種無量の因縁にあると語っている。そしてそこに性起の内幕が知られてくることになる。従つて、如來性起の法とは十種に代

表される因縁（因）に依つて出興する思議すべからざる大悲（果）であり、そこには思議すべからざる果を示す為に、因縁を以つてその内幕を明かすという因果關係が明かされる。そこに見出される關係は因縁から果を成ずるといふ異時間の因果關係を表すのではなく、如來性起の法が果体として出興する所に、その内幕としての因縁が菩薩の為に説明されるといふ因果同時の關係が示されると言えるであろう。この思議すべからざる大悲は『如來性起品』に展開する、如來出興の因縁を十種の比喻で説明する箇所（第六・七喻に

如來應供等正覺も亦復た是の如し。大悲の一味の法雨を雨らすも、應化する所に随て種種不同あり。

如來の大悲一味の法水も、衆生の器根の異なるに随うが故に、法雨に差別あり。（『大正藏』九・六一三中）

と示される如く一味であるが、その法水は衆生の器根に随つて異なる特質を有する由が示される。この様に衆生の器根に随つた因縁を以つて顕された如來性起として的大悲が淨土である。それは『論註』に

諸法平等なるを以つての故に発心等し 発心等きが故に道等し・道等きが故に大慈悲等し（『定親全』一、二五二）

と示される如く大悲一味として「法性」に随順せるものである。以上、「本」の義より展開される淨土は「華嚴經寶王如來性起義」に見出される因果同時の論理を以つて、衆生の器

根に随つて顕示される大悲として弥陀身土の内実を特色づける。ここに大悲としての浄土の性格を意義づけられる。

2、「性」の「積習」の義

②又言 積習成性 指法藏菩薩 集諸波羅蜜積習所成（定親全一、二五〇）

（「積習」の義について）引文②にいう「性」の義は「積習」して「性」を「成ズ」（成ずる）ものであり、いわゆる法藏菩薩を指す。それは法藏菩薩が現に性を成じているという事態を指すのである。しかしながらその法藏菩薩は続く文にて「諸波羅蜜」を集めて「積習」して「成ゼル」（成就した）所であると説示される。そこには前文の法藏菩薩の現動態に対して、法藏菩薩の「性」の成就という完了が語られてくるのである。ここに親鸞の法藏菩薩の理解が展開される所以を見出すのである。親鸞に於ける法藏菩薩の解釈は『一念多念文意』に示される如き、如よりの展開としての解釈（『唯信鈔文意』にも示される如き、方便法身の菩薩でありながら從因向果の菩薩として「設我得佛十方衆生（乃至）若不生者不取正覺」なる無限の現動態を有するもの）と、『浄土文類聚鈔』に見出される、從因至果なる菩薩としての解釈（十劫成道を以て示される如き、衆生救済の具体的方法が因果関係において説示されるもの。但しその因果関係も因果同時成立なる基盤によって成立する從因至果としての法藏菩薩の成就

が示される。）の二義がみられるのである。つまり当文に於いて、法藏菩薩は「積習して性を成ず」という活動の現在形でありながら、「諸波羅蜜を積習して成ぜる所」という活動の完了形を意味するものとして、その関係性を示すのである。このような法藏菩薩の顯現根拠は「性」の「本」義より展開されたものと言ひ得るであろう。つまり因果同時成立によって示された浄土と法藏菩薩は相依関係に於いて成立する大悲と内実であった。その内実である法藏菩薩は、衆生の器根によって展開する大悲の法水として法藏菩薩の修行と四十八願を顯示する。そこには因果相依関係なるが故に、因は因のまま法藏菩薩の修行という現動態を成立させる。又同時に因位法藏菩薩は衆生の為、救済の具体的方法の完成を意義づける從因至果なる菩薩として活動の完了形を成立させるのである。よってそのような意味から「性」の「積習」の義は、因果同時成立を基盤に展開する意味で、先の浄土に対して法藏菩薩の「行」（活動）の説示であり、「本」の義からの展開とも言ひ得るであろう。

以上、「本」の義より展開された因果同時の論理を以てて示された浄土と法藏菩薩の活動の相依関係は、続く「聖種性」の義に於いても見出される。そこには四十八願を因縁とし大悲なる安樂浄土が修起される事の論理が述べられているのである。つまり四十八願は浄土という果より見る時、因として

説かれるものであり、ここに『如来性起品』に見られた因果関係と同様な因果同時の関係が修起された浄土の内実として明かされてくるのである。

即ち「果中説因」と云われるように、この因果関係の意味するところには、いわゆる龍樹によつて指摘されるが如く、因果の固定的実体的見解の否定による相依相関なる縁起としての意味が強調されるべきである。つまり非因果なる第一義諦としての理性が、安樂浄土なる果を顕す事に依つて、同時に果の内実である因縁としての行願が示されるのであり、そこには相依なる縁起としての因果関係が成立する。相依なる因果関係は「因が因でありうるのは果が存在するからに他ならなく、又、果が果でありうるのは因が存在するからに他ならない」と説かれるように同時的であり、「因を離れて果はなく、果を離れて因はない」のである。このような相依なる因果は常に交互成就的な関わりにおいて成立するものである。よつてそのような大悲が、亦因果果の上に説明される時、浄土は誓願を因として完成される果として成立すると共に、その内実なる法蔵の願は浄土の具体的な現働態として成立するのである。ここに「果中説因」と説かれる意義があり、その因は凡夫救済を特色づける四十八願へと集約される。いわゆる浄土に於いて因果関係を示すことは方便法身としての別徳を顕す所の浄土教の肝要なる部分といえるであろう。

まとめ

以上の考察より、「性」の「本」義より示されてきた仏土は、非因果なる第一義諦としての理性が、大悲として展開された意味に於いて完成された弥陀身土であると云えよう。それと共に、その内実は亦因果果の上で説明され、浄土は誓願を因として完成せられる果となる。そこには因果相依によつた交互成就的あり方の基、因は因として成立する。即ち法蔵菩薩は衆生救済の願「設我得仏十方衆生（乃至）若不生者不取正覺」を果たす為に「不可思議兆載永劫に於いて菩薩の無量の徳行を積植」しつづける働きのとして、又衆生の救済法を明かす徒因至果なる菩薩として因相を顕現するのである。これらの因果関係こそ「性」の「本」義に示された因果同時成立を基盤に展開される関係となるのである。よつてそこには因果同時成立によつて明示される誓願酬報としての本質が示されると共に、その働きの本願力として、今まさに働きてある浄土の内実が示される。そこには同時的因果（相依）によつて示される如き眞実報土としての「不可思議光如来」「無量光明土」としての弥陀身土が示されるのである。

（キーワード） 性功德、本、如来性起、因果同時、法蔵菩薩

（龍谷大学研究生）

140. Shinran's Idea of "ōchō"

Hidemaro OKAZAKI

This paper considers the term *ōchō* 横超, an important term in Shinran's thought. According to Shinran, "Ōchō is the basic meaning of Jōdo Shins-hū." Since the word is drawn from the Larger Pure Land Sūtra and Zendou, this paper examines the case of the former. An additional point is the term *jinen* (自然), which is used differently in the Larger Pure Land Sūtra and by Shinran, a difference which is important for our consideration of the term *ōchō*.

141. The Meaning of "Shōkudoku" in Shinran's Thought

Toyokazu AJIRO

Why did Shinran quote the *Wangsheng lunzhu's* explanation of "Shōkudoku" in the "True Buddha Land" chapter of the *Kyōgyōshinsho*? I most particularly examine the question of the intent behind the quotation with regard to the "original" meaning of "Shōkudoku". I conclude that the intent of the quotation is to demonstrate the reason why the True Buddha's Recomposed Land is established as fulfillment of the Primal Vow. In other words, the reason clarifies the theory of simultaneous cause and effect according to the "original" meaning.

142. On the Expression "ōjō wo togu" in *Tannishō*

Tetsuryō HARADA

I consider here the significance of the expression "ōjō wo togu" in *Tannishō* Chapter III considering how it differs from the expression "ōjō wo su" in the Daigo *Hōnenshōnin-denki* and the *Kudenshō* of Kakunyo.

A verb "togu" expresses the difficulty of a desire, an intention or an act, of the subject. However, it cannot be said that the distinction in expression of "togu" and "su" in the phrases "ōjō wo togu" and "ōjō wo su" is clear in